

奈良時代の瓦窯跡を新発見

—二条大路木簡記載の「越田瓦屋」—

平城京南方遺跡 北之庄町

平城京跡南側にある平城京南方遺跡の東南端で、新たに奈良時代の瓦窯を1基発見しました。現場は旧国道24号線の西側に接し、周辺の水田よりやや小高い土盛りがあり、この土盛りの東側斜面に瓦窯が築かれていました。瓦窯は東西方向に細長い形に復原できますが、東側部分は旧国道の道路擁壁により破壊され、西側部分の長さ約2.4m分が残るのみです。今回の発掘調査は限定的な調査のため、瓦窯の詳細な構造等は不明ですが、僅かな情報からその姿を追ってみましょう。

瓦窯の構造

この頃の瓦窯は、丘陵などの斜面地に築かれ、その高低差を利用して低い部分に「焚口」と「燃焼室」（燃料の薪を焚く場所）、中程に「焼成室」（製品の瓦を納める部分）、最上部に「煙道」（煙突部分）を配置します。また焼成室の床面が平坦なものを「平窯」、登り勾配のあるものを「甕窯」と分類しています。今回検出の瓦窯は、焼成室と煙道の一部が残存しています。焼成室は奥壁と南側の側壁が残り、方形に近い平面形と考えられ、内法で幅約1.6m、長さ1.3m以上あります。南側の側壁は日干煉瓦を積み上げ築かれます。床面に



調査地位置図 (1/15,000)

は高温により堅く焼け締まった粘土層が上下2層あり、作り替えられていることがわかります。上層の床面は東側に向かい緩い勾配で下降しますが、構造が甕窯か平窯かの判断には苦慮します。

煙道は磚を積み上げて作る点の特徴です。7段分（高さ約0.5m）の磚積が確認出来、南北に平行する2条の磚積の間の約0.7mが煙道と考えられますが、未調査のため詳細な構造は不明です。



調査地全景（南から）

調査地内では、この他にも瓦や窯壁・焼土が散布しており、未確認ですが複数の瓦窯が周辺にあったようです。

出土瓦埴類をみる

出土瓦埴類には丸瓦・平瓦・埴・日干煉瓦があります。このうち埴・日干煉瓦には、繊維が入った粘土が溶着しており、瓦窯の構築部材であったとみられます。埴の中には、両端部の長さが異なるものがあり、これらは瓦窯の天井部に用いられた構築部材と考えられます。

瓦窯の製品とみられるものには丸瓦・平瓦があります。古代の平瓦の作り方には「桶巻き作り」（横骨とよばれる桶状の型に布袋をかぶせ、そこに粘土を巻きつけ、成形したのち4分割する技法）と「一枚作り」（蒲葺形の成形台に布を敷き、この上に一枚分の粘土板をのせ、成形する技法）があります。両者の区別は平瓦凹面の横骨痕の有無がひとつの指標となります。

瓦窯の製品とみられる平瓦には、凹面に横骨痕の無い「一枚作り」と、横骨痕らしき浅い段差が残るものに分けることができます。後者は一見「桶巻き作り」とみられますが、凹面の側縁に沿って布端の圧痕あり、また隅部の破片には布端の圧痕がL字形に残っているものがあります。このような痕跡は布袋を使う「桶巻き作り」によるものと考え難く、短冊形の板をならべた成形台を使用し



出土瓦類（手前は製品とみられる丸瓦・平瓦、それより奥は窯の構築部材である埴・日干煉瓦）

た「一枚作り」と考えられます。平城京出土瓦の研究では、このような短冊形の板をならべた成形台による平瓦の製作は、730年頃には終息しているとみられており、今回発見された瓦窯の操業年代を考える手掛かりともなります。

瓦窯の製品の供給先や瓦窯の管掌機関を考えると重要な軒瓦は、今回の調査では出土しませんでした。今後さらに緻密な出土瓦類の分析により、明らかになるものと期待されます。

「越田瓦屋」について

今回の調査地周辺には、「瓦山」・「這（灰？）登り」等の瓦窯を連想させる字名がみられ、周辺に多くの瓦窯の存在が想定されます。調査地北側にある五徳池は、古代には「越田池」と呼ばれていました。長屋王邸北側で発見された膨大な数の二条大路木簡のひとつに、「越田瓦屋」の記述があり、池の周辺に造瓦所があったことが想定されていました。今回の瓦窯跡の発見は、「越田瓦屋」が実在したこと裏付けたものと評価できます。

また、調査地周辺には、「宮」・「堂」等の大きな建物を連想させる字名も見られ、その周辺には奈良時代の離宮も想定されています。

二条大路木簡は光明皇后の皇后宮の木簡と考えられていることから、周辺一帯には皇后宮に附属する施設があった可能性があり、今後の調査の進展が期待されます。



調査地と周辺の字名（1/5,000）